新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2008.vol.1　37～46

箱庭と遊び
―幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について（2）―

真壁　あさみ[1)]・伊藤　真理子[2)]・近田　裕之[2)]・間藤　侑[2)]
田中　弘子[2)]・高橋　徹[2)]・國塚　拓郎[2)]・長谷川　智紀[2)]
[1)]新潟青陵大学看護福祉心理学部
[2)]新潟青陵大学大学院

キーワード：箱庭療法　遊び　幼稚園児

PLAY in Sandplay Therapy
— A Study of Sandplay process by kindergarten pupils（2）—

Asami Makabe, Mariko Itoh, Hiroyuki Konta, Susumu Matoh,
Hiroko Tanaka, Toru Takahashi, Takuro Kunizuka, Tomonori Hasegawa
[1)]Niigata Seiryo University, Department of social welfare and psychology
[2)]Graduate School of Niigata Seiryo University

Key words：Sandplay Therapy, Play, Kindergarten pupils

Ⅰ．本論の目的

前回の研究では幼稚園児の箱庭制作の過程を、玩具や砂を介した立会人との遊びも含めて関与観察し、幼稚園児の箱庭制作過程の特徴を一方で数量的にとらえようと試み、また、もう一方では個々の事例から　1．自我発達と作品の統合度について　2．砂をつかった遊びについて　3．立会人との関係性について考察した。

また、前回の研究では部分的な結合段階から統合へといたる変化を4歳児に多く見ることができたため、今回は、4歳児に焦点をあてることとした。継続的に箱庭作成をしてもらった10事例の中から2事例を選び、経時的な変化から幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について考察する。

今回選んだ2事例は、いずれも立会人との関係性の成立に伴い、箱庭の変化が見られた事例であり、また、制作したものを破壊したり、一度作ったものを更地にしてやり直すなど、完成した作品だけからは読み取れない、変化に富んだ展開を見せてくれた事例である。今までの完成した作品に対する基礎的研究を踏まえながら、幼稚園児の箱庭についての考察を深めたい。

Ⅱ．調査方法

制作者：S幼稚園の園児2名（男児A、女児B）
立会人：臨床心理学専攻の教員1名、大学院生1名がそれぞれ担当する園児の制作に立ち会う
期間：2007年1月～2008年　1月の間にAは4回、Bは3回制作
材料：箱庭制作用具一式（砂は乾いたもの）、砂の高さは底から2㎝に統一。記録用として、ビデオカメラ、デジタルカメラ、統一した記録用紙（フェイスシート）を使用。

Ⅲ．手続き

幼稚園内にある図書室に箱庭用具を設置し、部屋の隅にビデオカメラを固定。立会人は園児の部屋か

ら、園児と一緒に箱庭の設置してある部屋に入り、自己紹介をする。砂とおもちゃを使用して何か作ること、時間は30分であることなどを、園児の理解に合わせて説明して制作を始めてもらう。制作中は園児が自由に表現ができるように受容的に見守った。終了後、園児をクラスに見送ってから、終了後の箱庭の写真撮影や、記録用紙への記録を行った。調査終了後は研究メンバーが定期的に集まり、ビデオを見て意見を交換した。

Ⅳ．倫理的配慮

幼稚園の保護者に調査の説明を紙面にて行い、協力をいただける場合には書面で回答をいただき、その中から、幼稚園教諭に適当と思われる児を10人抽出していただいた。今回取りあげる事例はその中の２事例である。

Ⅴ．箱庭制作の経過

※園児「　」、立会人＜　＞でことばを表記することとする。

１．事例Ａ　男児

＃１　2007年１月（４歳８か月）

Ａを部屋に迎えに行くと、幼稚園教諭の陰に隠れてしまったので、幼稚園教諭が代わりに自己紹介をした。箱庭を実施する部屋で、立会人が教示を行うと、ためらっているのか、あるいは状況が把握できないという様子であった。最初、Ａはおもちゃを置くたびに立会人の様子を伺っていた。乗り物や建物などの玩具を置いていき、開始後５分後頃、箱庭中央にマリア像を迷いながら置いた。

その後は、あまり立会人の顔を見ることはなくなった。ウルトラマンとゴジラを対峙させ“戦い”の場面を作った。他にも、海賊とウルトラマンを対峙させた。全体的に動物，乗り物，建物を中心に置いていき，箱庭全体をいろいろな方向から眺めながら制作する姿も見られた。バイクの横に“緑のビー玉”を強く押し込むように置いた。だんだんに箱庭の中が混み合ってきて、置こうとして玩具を手に取るがスペースが無いのであきらめて別のものを探すという場面が何回か見られる。

最後に右側の箱の縁近くに柵を置いて終了となる（写真１）。

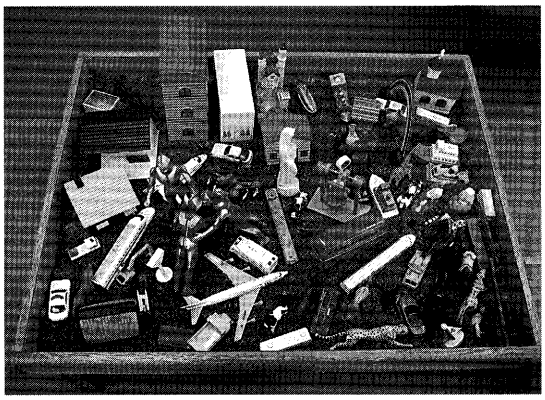

写真１

＃２　2007年７月（５歳２か月）

Ａは、モジモジした様子で先生に促される形で立会人と箱庭へ向かった。教示を行っている時、Ａは玩具をじっと見ながら立ち尽くしていた。最初に、線路，飛行機，駅を置く。駅は線路の真上であったが明らかに線路と関連づけている。他の建物などに続いて、ウルトラマンを４体置いた。さらに、園児は線路と線路を繋ぎ完成させると、その上に新幹線を走らせ、アパートや橋を置いていった。橋は全部で３つばらばらに置かれたが、向きは一致しており、「街」であることを感じさせられる。

その後は墓や教会、井戸などを置き、信号やお城を置くときは置く場所を吟味していた。教会を前回マリア像を置いた位置に配置する。また、前回見られなかった花や木を配置し、橋の周りと、箱の側面にそって柵を置く。消防車に橋を渡らせようと試みる。自動車を少し置いてから、ブルドーザーで砂を掘ったりした。

青く透き通ったテトラポット型のものを花の脇に置き、井戸の横にも２つ置く。終わりにするかどうか少し考えている様子。＜どう？もうちょっと置く？＞「置く･･･」と小さい声で答えた。透き通ったブロックを花の横に、巻き貝を教会の脇に、また、ビー玉”を墓の前や青いガラス、巻き貝、赤いガラス、青い石などを右側から手前を通って左側へと置いていった。３つある橋全部の横にもパラパラと置く。

園児は、さらに、墓を持ち上げ、下にビー玉を埋めて墓石を元に戻して、地ならしをして終了。橋の近くのガラスやビー玉は水を連想させる（写真２）。

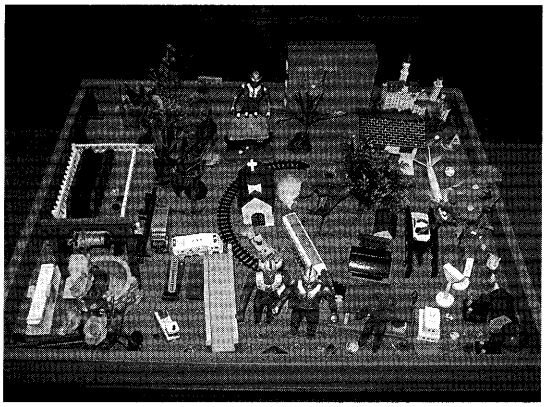

写真２

＃３　2007年10月（５歳５か月）

立会人と会うとニコニコしており、口数も多く、すぐに玩具を手にとって始めた。最初に消防車を埋める。また、橋をしっかりと押さえつける様に置いていった。さらに、乗り物や建物を置く。カメラにむかって舌を出したり、ふざける様子も見られた。お城を神輿のように担ぎながら運んでいた。

井戸やブランコを使って遊んだ後、ビー玉や青いガラスを砂の中に押し込みながら、「つっこむのがうまいんだよ～埋まった、ここには不思議なものがあるんだ」と言い、貝や赤いガラスも埋めていく。次に、石やパトカーを埋めると「助けて～、海だから～」＜埋まっていく～＞「これは大丈夫」と言って石を指す。園児は、海の中では乗り物はダメ（埋まっていく）で、建物や石などは大丈夫と立会人に説明した。同じように箱庭の上に置かれているが、あるものは大丈夫であるものはダメという、見ただけではわからないが、はっきりとした区別をしていた。

その後、パトカーなどに砂をかけていると埋まってた石が出てきて、Ａはそれを“幻の石”と言って他の石も箱庭に埋めていった。ポケモンやブルドーザーを埋めると、アパートや家を入り口が箱庭の枠に向くように置いていった。「誰も入れない、入れない僕の家。入るの超大変だよ。海の中だから、お家がバンバカ埋まって、僕の家は入れない」＜あ～入れない＞「面白くなってくるなー。どんなお家も埋まちゃって、僕のお家がないよ。」＜無くなっちゃう＞「俺の家はこれ（城）だ。だから大丈夫。」と立会人に教える。

その後、「海が綺麗になっていく」と星を置いていく。「海の魚がいない」＜海の魚いないんだ＞と言うと、消防署やブランコ、トラックや橋などを魚にして置いていく。

それから、「怖いもの発生、怖いもの発生」と言いながら、ビー玉を目に見立て、貝や果物を口に見立てて顔を作っていく。砂の中から目と口が浮かび上がってくる様な感じで、“怖いもの”は次々に発生し、「怖いもの発生～、何かわからないもの発生～、怪獣発生～」と言い、ウルトラマンも登場するがすぐに倒され死んでしまい箱庭から取り除かれてしまう。“怖いもの”はさらに発生し、Ｋが＜怖いのいっぱい出てくる～＞、園児は「地球が爆発するまで出てくる～」と言いながら置いていく。最後には“騙している怖いもの”や“赤ちゃん怖いもの”も登場してくる。時間になり終了（写真３）。

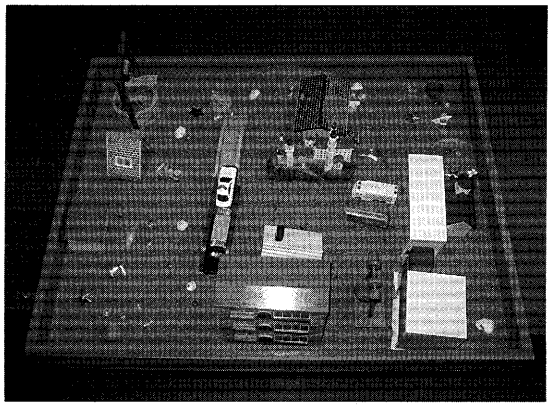

写真３

＃４　2008年１月（５歳８か月）

立会人に会うとモジモジした様子で、前回と違う印象であったが、教示をするとリラックスしたようであった。最初に、虹を置き、青いガラスを虹のそばに埋めた。その後、乗り物(車、新幹線)や建物(駅、墓（前々回と同じ右手前側の場所）、病院、学校)を置いていく。

井戸とスペースシャトルで遊び、井戸の上にスペースシャトルを乗せて終わる。次に、アパートを持ち出し駅の上にのせ、さらにアパートを逆さにし「ガシガシドッドッ、天井が横になって人が倒れる～」。ピカチューを顔だけ出して埋め「顔だけ状態」。また、電車を埋めてお城をその上に置き「電車が潰れた～人もつぶれて死んでしまった」、さらに柵でお城を囲み「柵で囲んで誰も入れないし～お城は牢屋に捕まった」。

柵の中に星を置く。次にパトカー、トラック、ショベルカーを持ってきて「パトカー取り合い」と言

いながらパトカーを両方から取り合っているようにトラックとショベルカーを斜めに立てかける。その上に救急車も乗せる。柵で駅を囲み、信号を逆さに置くが倒れ、柵も倒れてしまう。倒れた柵を直そうとすると、積んでいた車が倒れる。すると、園児は「ガシャーン」と言いながら駅や電車、墓を倒し、虹や他の乗り物も倒していく。アパートも倒すが「ガシャーン」と言って元通りに直した。「乗り物だけ倒れる」と言って全ての乗り物を倒し、柵や駅は直っていった。埋めていた飛行機も掘り返して裏返し「乗り物だけ倒れて、世界はどうなる」＜世界どうなるんだろう＞「どうにもならない」と言い、他の乗り物も倒しながら置いていく。

その後、ビー玉を駅の屋根から滑り落とさせる。倒れている乗り物を砂に埋めながら「沈んでいく」。「世界はまた元に戻った」と倒れているものをもう一度起こす。「どこが海で、どこが道だかわかんない、混ざってる、どこだかわからない」、箱庭の淵を指して「空はここ、空は四角」。恐竜を持ち出し「壊せ～」と言って暴れだす。「自分がやられてんじゃん」と言い、虹や乗り物を倒していき「ここで暮らそう」と言ってアパートを倒す。

「お化けを呼んだのは恐竜だった」、「今度お化け出てきた～」と言って、ビー玉を目や口に見立てて置いていき「本当はお化けの仕業なんだよ～お化けがこういうメチャメチャにしたんだよ、酷いことする」。

ビー玉を学校の後ろと箱の縁との狭い空間に一生懸命入れ込んでゆく。病院の上に橋を置き、その橋の上に救急車を置く。それから、ビー玉をつかんでお城を囲んでいる柵の前にぱらぱらと置く。橋が2つ右側に並行して置かれる。その間には倒れた乗り物が数個あるが、頓着しない様子でその場所に橋を押さえつけて置く。マリア像を病院の上に箱の外を向くように置いて、じっとマリア像の顔を見る。立会人の顔も見る。

立会人がAの仕草のまねをしたことから、机の両側でまねっこや隠れる遊びが展開される。ポストをマリア像のそばに置こうとするが、うまく置けず、マリア像も一緒に下に落ちてしまうが、気にとめる様子もなく、そのままにして、次のおもちゃを探す。滑り台を駅に重ねて置く。十字架を箱庭の中で回転させ「街を壊す気だ」。大仏と、もう一つの十字架を無造作に箱庭に放り込む。自分の手で学校を倒し、城を倒し、橋を倒し、駅を倒す。

最後にばらばらっとビー玉を放り込み「はい、できた」。パトカーが縦に立ててあるのを見て「パトカー生えてきた」、井戸や恐竜を倒して「最後に恐竜死んだ～」と終わる。＜メチャクチャだ～＞「メチャクチャだ～」＜本当にメチャクチャになっちゃったね＞「いいのいいの、これで･･･おわり」（写真4）。

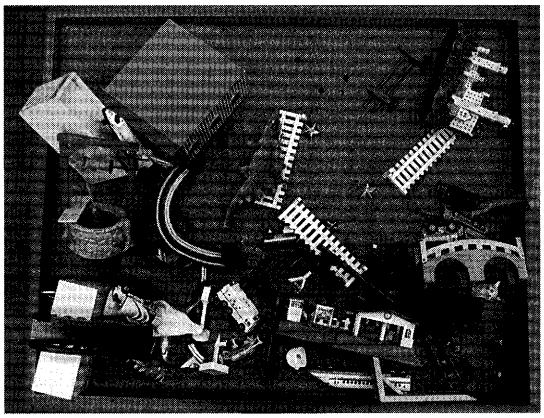

写真4

2．事例B　女児

＃1　2007年7月（5歳1か月）

ゆっくり落ち着いた感じで入ってくる。砂やおもちゃがどうやってここに来たのか質問あり。「砂場の砂？」「お外にも松がある」など、幼稚園の環境との関連づけあり。

はじめの5分で芝生を敷いたり、花や木を植えたりして「できた」と一度終了する（写真5）。

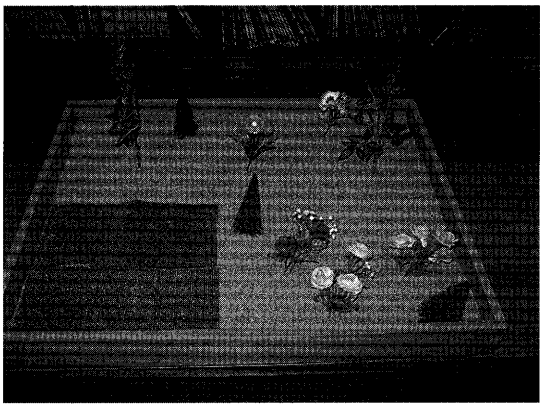

写真5

立会人と一緒に少し鑑賞してから、立会人が＜これで終わりにする？それとも違うものつくる？＞と

聞くと、もっと、別なものを作りたいとのことで2作目を作る。

はじめに松を探すが、1つしか見つからなくて残念そう。針葉樹の葉っぱを松の代わりに植える。赤い実の付いた植物を「幼稚園にある」と、やはり幼稚園と関連づけている。松→花→家→教会→お店と置く。お店は「これ重い」と立会人に見せたりその後のバラの花では「これ、とげがないね。前にバラの刺が刺さったことある」。と立会人と会話しながら進む。松ぼっくりを置いたところで、一度「終わった」というが、井戸を見つけて置き、その後、線路、花、駅、小さい家、トンネルなどを置いたり、位置を移動させたりして、自分なりの世界が広がっていく様子だった。井戸のバケツや井戸の中にビー玉を入れたりして中身もできてくる。透明な青いテトラポットを砂の上に置き、金色の星を松と松ぼっくりの間に埋めて、立合人の顔を見てにこっと笑った。おはじきを滑り台で滑らせたり、シーソーに乗せたりして遊ぶ場所ができた。最後に松の葉を植えて終了（写真6）。

後片付けはどうするのかということも立会人に確認した。

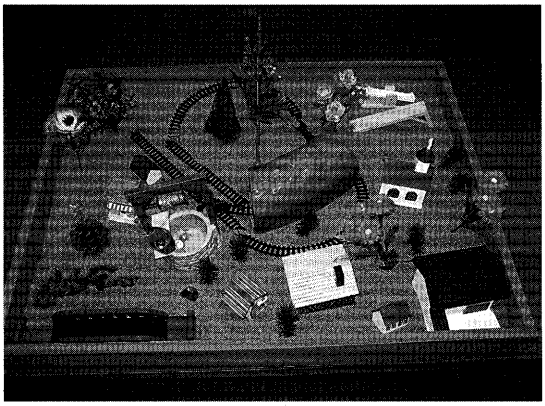

写真6

＃2　2007年11月（5歳4か月）

はじめに針葉樹、芝生、花、木、井戸、線路　トンネルなどを置く。「これ、どうしたの？」など、おもちゃはどこから来たのか確認あり。7分ほど置いた後で、「お花とかやめる」と花を取り除く。駅を置き、線路をつなぐ、滑り台とブランコを置いて、小さな家や、椅子を置いて、「この砂どこから持ってきたの？」と質問しながら今まで、置いた物を取り除き始める。取り除きながら「これ木でできてるんでしょう？」「木にペンキを塗ったんでしょう？」と箱庭のマテリアルについても質問がある。トンネル→線路→椅子→おうちを撤去。

「座ってやりたい」と椅子をだして座る。芝生を取り除きブランコと滑り台だけをさわっているが全部片付けて更地になる（はじめから13分）。

「これ、どうしたの？」と聞きながら赤いきらきらしたブロックを埋めて出す。ビー玉やきらきらしたブロックを並べ始める。お家をたてるときも「これ木でしょう？」と確認あり。滑り台、木のブロック、バナナやリンゴも砂の上に置く。リンゴは「マークと同じ」と胸に下げている自分の名札のマークを見せてくれる。三連の橋をつくり、花を植え、貝を置く。ビー玉やブロックを一つずつ置いていく。星の形の物は橋のそばに並べる。どんどんきらきらした物を置いてゆく。

ときどきビー玉に橋を渡らせたり、滑り台で遊ばせたりする。前に滑ったビー玉にコツンと当てているようでもある。滑り台を、ビー玉を配置する道具のように使って、途中で滑り台を撤去。

「もうすぐで1いく」と時計を自分で見ている。屋根からビー玉が落ちて、地面に置かれたり、橋をビー玉が渡ってそこで、落ちてそのままそこに置かれたりする。

丁寧にビー玉を全部配置する。「年長になってもやるの？」「やってくださいって言われてやるの？」などの質問あり。最後に針葉樹と広葉樹を植えて、「おわった」と。このとき、立会人をじっと見つめて「これビー玉とかの工場」と説明がある。どう言われるのか反応を気にする様子だった。しばらく一緒に見て、片付けるのかどうか質問があり、名残惜しそうな様子で退室する（写真7）。

写真7

＃３　2008年１月（５歳７か月）

「椅子がない」と入ってくるなり言い、椅子をセットして座り、砂のことを「どこからもってきたの？」などと聞く。

針葉樹を植えて、ビー玉の箱を持ってきてビー玉を置き始めるが、２個ほど置いたところで箱を戻して、線路をつないで置く。家、背の高い実のついた木、ビー玉などを置く。針葉樹のそばにみかんを置いて「みかんの木」という。＜ああ、なるほどみかんの木＞と言うと、「やっぱりこれやめる」とビー玉以外のものは片付けてしまう。

橋を置き、ビー玉を丁寧に置いてゆくが途中でまた、ビー玉の箱をしまう。ブランコ、教会、家、お花、松の木、広葉樹を置いてから、また少しビー玉を並べる。赤い花、スイレンを置いて、ビー玉の箱を持ってきて、また少しビー玉を置くが、「お花とかやめる」とビー玉以外を撤去する。「これってうち（自分）だけがやるの？」と質問あり。

ビー玉を丁寧に置く。ビー玉の箱の中に砂が混じっていることを少し気にしている。全面にビー玉を配置して、バス停（降りるバス停）を置いて「できた」という。「これ、宝の島」。また、じっと立会人を見る。その後片付けようかと申し出があるが、立会人がやるからいいよと言う。写真をとったりすることを言うと、写真を飾っておくのか聞く。

積み木を置き、果物を「おなかがすくと困る」と置き、滑り台、橋を置く。シーソーも「遊びたくなるかもしれないから」と置く。虹を置くときに、「これ逆、赤い方が上だよ」という。バス停のそばに配置。柵を両脇に配置して、「できた」という。お話があるかきくと「こんな国本当にあるかもしれない」という。「みかんがおちてたら、食べていいの。イチゴも、りんごも食べていいの。」「積み木であそんだりする」と説明あり。星を集めて４つ並べる。虹の門をしっかりとする。付け足すものあるか尋ねるとバナナと、イチゴを付け足す（写真８）。

離れがたいという感じで帰ろうとしないので、一緒に記録用の写真をとる。箱庭の向こうに少しだけ自分がうつっているのをデジカメの記録で見て、笑顔を見せる。安心したのか部屋に帰っていく。

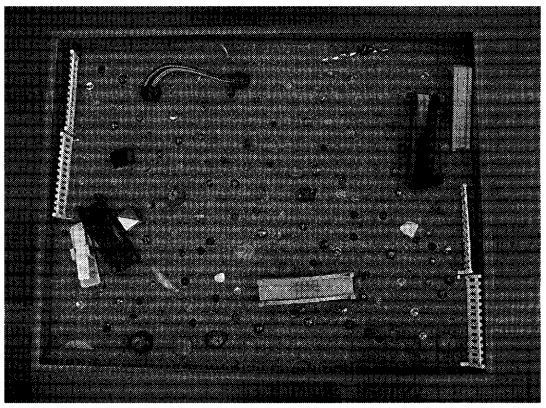

写真８

Ⅵ．事例に関する考察

１．自我発達と作品の統合度

筆者ら（2007）の研究では、自我発達と作品の統合度について３段階に分けて考察している。Ａの＃１の箱庭はその中の第二段階目にあたる「玩具の意味の発生と物語による部分的な結合の段階」と見られ、箱庭全体にひとつの情景が浮かび上がってくるというものではないが、それが＃２では線路や駅がまず関係づけられ、建物が配置され、川の流れを読み取るのは難しいものの橋が同じ方向を向いて置かれており、街の情景が意識されていることがわかる。＃１でたくさん置かれた動物たちに代わって木や花が町並みに彩りを添えている。＃１から＃４までのＡの特徴のひとつは自我の発達とともに作品の統合度が高まっていっているということである。

Ｂの箱庭は、年中になってからのものしかないので、はじめから、統合度は高く、置いたものが互いに関連しあったひとつの世界が表現されている。

２．埋めること

Ａは箱庭制作において＃１ではほとんど砂に触れることはなかった。物を埋めるという行為が見られ始めたのは＃２からであった。しかし、＃２ではあくまで“埋める”という行為が主であり、墓の下にビー玉を埋めたことなどは特徴的であったが、それを掘り返すまでには至らなかった。それが、＃３では“埋める”という行為の後に、“出現する”という表現が見られた。これは、園児の中でイキイキとしたものが湧き出てきたような印象でもあった。回を重ねるごとに砂への接触は増えている。

Ｂの場合は、＃１の終わり近くに星を指で松の木

のあたりに押し込んで、にこっと笑っている。＃２以降からは前回埋めていた星が、他の星と手をつなぐように並べられている。

山本（2002）は箱庭がいかに平面的に制作しても、常に三次元的な示唆を含んで体験されるとして、その特性を「心理的には意識（表面）と前意識（砂に隠れる部分）、無意識（箱の外と箱の底より下の空間）とのアナロジーが成立する」としている。また、「箱庭の微妙な砂の深みが、実際に制作され、表現されたものと作品に現れなかったものとを分離しつつ結びつける「中間領域」として別の作品に生まれて（現れて）くるであろう「何か」を可能性として用意しているということが出来るのである」とも述べている。回を重ねて変化してゆく箱庭を体の断層撮影ならぬ、心の断層撮影（山本は「こころの包み」と表現）としてとらえるならば、その垂直方向への広がりは考えてしかるべきであろう。また、山本によるとそれは、空間だけでなく、時間的にも移動して、あらゆる方向への移動の可能性を包含しながら精査（移動）し、内面世界にある可能性を実現（経験）していく。

こう考えると、たとえば、Ａの作品では、＃２で墓の下に埋められた「ビー玉」が＃３で地底からふつふつと現れてくる「怖いもの」であるかも知れないし、Ｂが＃１で地中に押し込めた星は、＃２のより下層の世界で他の星と手をつなぐことになったのかも知れない。このように、箱庭という断面が心という仮想空間に位置しているという理解は、一人の人の複数の箱庭を見るときに、大変有用な知見であると思われる。

また、埋めること、または墓の下に埋めることは埋葬を連想させるが、文字どおり「他界する」ことともつながっているのかも知れない。

西村（2001）は「砂は身体と同じような感覚があり、砂との接触の回避はスキンシップの回避でもある」としている。岩堂ら（1972）の研究では３歳児と４歳児の砂の使用は５歳児のそれと比べて有意に多かったという結果が出ているが、筆者ら（2007）の調査では有意差は無かったものの砂への接触は年長になるにつれて多くなっている。これは、「砂の使用」と「砂への接触」という表記の仕方の違いからもわかるように、観察者が何を基準にしてデータをとったかの違いもあるかもしれない。

筆者らの観察によると、確かに砂自体と積極的に関わっていたのは年少児であり、砂の上に何かを映し出す前に、その土台をこねているような感じもした。年中児もおもちゃを埋めたり出したりという遊びが多いが、年長児になると井戸のバケツで砂を汲んだり、土木作業車で砂を掘ったりという、全体の構成の中での砂との関わりが増えるように思われる。

３．宗教的玩具について

Ａの＃１では中心にマリア像が置かれ、＃２では中心に教会が置かれた。立会人はＡとの関係が不成立の状態にあったことによる代わりの見守り手という意味合いだったのではないかと感じている。Ａの＃３、＃４では、立会人と関わりながら、説明したり、話したりしながら行われ、特に「守り」と見られるものは置かれずに、むしろ、＃４でマリア像、十字架、大仏などは壊すものとして登場している。

Ｂの＃２、＃３では特に宗教的玩具は置かれていない。立会人との関係が成立していないとき、４－５歳児では、何か代わりの頼るものを使用して箱庭制作のための安心を得るということが考えられる。岡田ら（1974）の調査によると宗教的玩具は箱庭を縦横３つに分け、９分割にしたとき、大人も子どもも中央と、左上に比較的多く置かれるという結果を報告している。また、河合ら（1976）の調査によると、11～12歳男子、13～14歳男子、10～12歳の情緒障害児のいずれもが、中央の領域を重要と感じている。ＡもＢも重要な位置に「守り」となるものを置いて安心を得る作業をしていたと考えられる。

４．関係性について

宗教的玩具の考察とも重なるが、園児の箱庭制作において、立会人との関係は軸となるようなテーマの一つであると言える。Ａの＃１、＃２では、立会人との関係が成立しておらず、園児はあくまで自分の中で代わりとなる見守り手を置くしかなかった。しかし、＃３から立会人との関係ができてきたことにより、園児の箱庭も大きく動き出した。園児と立会人との関係の成立は、それまでの箱庭には見られなかった“怖いもの”の出現へと至らせた。これは、園児が立会人との関係を基盤にし、未知なるものへと対峙するところまでに至ったようにも感じられた。さらに、関係性の成立は、今まで作ってきた基盤を壊すという行為にまで影響したように思われる。しかし、完全に自分の中で破壊を受け止めるまでには至っておらず、あくまで立会人の様子を伺いながらという『静かな破壊』であった。このことから、園

児は少しずつ自我を確立しつつあり、次の段階の未知なるものへの接触を行っているのではないだろうか。

Ｂの場合も、回を重ねるごとに、ビー玉の世界が出やすく、また、イキイキとしたものになっていった。Ｂの特徴のひとつとして、何回もやり直すということがある。＃１では最初の作品を仕上げ、再スタートをしたのは７分後であるし、＃２では一度作ったものを撤去して更地にしてから再スタートしたのは13分後、＃３でも、最終的な場面を置き始めるまでに２回更地にして13分かかっている。自分だけの豊かな世界を持っているが、簡単にはのぞかせてくれないし、自分もそこにたっぷりと浸ることができにくいようである。立会人との関係がだんだんにできてくると、すこしずつ自分だけの世界を表現できるようである。最後の回は、かなりあからさまに自分の世界を出したので、柵が必要になったのであろう。

Ａの場合もＢの場合もはじめは立会人の顔を伺い見るような仕草が多いが、だんだんに少なくなり、回を重ねる事に、よりイキイキとした、自分なりの表現をしている。しかし、一方で、Ａの場合は＃４の破壊の時も立会人の様子をうかがいながらの『静かな破壊』であったり、Ｂは言われなくても自分から作品に名前をつけたり、「こんな国ほんとうにあるかもしれない」と立会人に告げたりして、生々しい（遊びの中での）現実を少し和らげるようにして終えている。自分の中にあるものを表現したと思えるとき、表現しすぎて脅かされるとき、それに対する防衛も添えられるのかもしれない。

４．用途の定まっていないおもちゃ

Ａ、Ｂともに回を重ねるごとにより、イキイキとした自分だけの世界を表現するようになるが、そこに関わっているおもちゃが特定の用途の無い、透明ブロックやビー玉であった。岩堂ら（1972）の研究では、３歳児から５歳児までの幼児の27～38％がタイル・ビー玉・石・貝・くさりなどの特定の用途を持たないおもちゃをつかって作っており、「幼児は、ビー玉、タイル、ブロックなどカラフルであり、特別な用途を持たぬ単純形の玩具を好んで使う傾向がある」としている。また、これらは説明のできない「何か」として砂の中に埋められたり、他の玩具の間にそっと置かれたりしていて、「未来あるいは「可能性」を暗示するかのようなこれらの玩具の使われ方は興味深い」と述べている。

Ａの場合のビー玉や透明ブロックの使われ方は、＃１で中央部のバイクと電車と二階建てバスとブランコに囲まれたところに１つだけ押しつけるように置かれ、＃２では、手前と右側の箱の縁に添ってビー玉が置かれ、また、井戸の向こう側、橋を囲んだ柵の中に置かれている。そのほか、特に墓の下にビー玉を埋め込んでいる。＃３では地中から浮かび上がってくる顔の目や口としてビー玉や巻き貝、星が使われており、＃４ではビー玉を学校の後ろと箱の縁との狭い空間に一生懸命入れ込み、お城を囲んでいる柵の前にぱらぱらと置き、最後に壊された街の上にばらばらっと放り込み「はいできた。」と言っている。

Ｂに関しては＃１では星をひとつ指で砂の中に埋めこんだり、井戸の中、バケツの中にビー玉を入れている。＃２ではビー玉や透明ブロックを一面に並べ、＃３でも全面にビー玉を並べている。

このような、用途の定まっていないおもちゃを自分なりの表現に使うことで、見るものはより、「その子らしさ」のように感じる。それは、それらのおもちゃを自分の中にある「何かわからないもの」として立会人と共有しており、それを見守ってゆくことで内界の表現が展開してゆく様にも思える。治療場面では治療的に働くカギとなるのではないだろうか。

５．植物の使用に関して

岩堂ら（1972）の調査によると成人や小学生に比べて植物を使う幼児の割合はすくない。河合らの調査でも、幼児、小３、小６、中学生を比べると、年齢の増加につれて、植物の使用が増えている。また、木村（1985）は、大学生を対象にしたロールシャッハ反応と箱庭作品の特徴を比較検討しているが、植物を多数使用している群にはＰ反応が有意に多く、またFc反応が多い傾向があり、少数使用群ではＡ％が有意に高い。それ故、成人においては、植物の使用の多少が制作者の成熟の度合いと関係するのではないかと考察している。これは、前述の岩堂らや河合らの調査と一致している。

さらに木村は、「箱庭に植物を多数配置すると、世界は風景として美しく、見た目にも感じの良いものとなる」と述べ、客観的な視野を持つこととの関連について示唆している。

今回の調査では、Ａは＃２でのみ植物を使用している。＃１では、全体としてのまとまりが無いが、

＃２から統合された場面展開になっている。Ｂは＃１～＃３まで毎回使用しているが、「お花とかやめる」と、いったん置いた植物を除去して、最後に数個置いたり、＃３では途中では使っていたが、最終的には植物は置かれていない。

この２人の植物の置き方を見ると、はじめ植物が見られていても、その後の回では、見られなくなったり、非常に少なくなっていることが、共通点としてあげられる。Ａの場合には、統合された、理解される箱庭を置いたときに植物が見られ、Ｂでは「やっぱりやめる」とやり直す前の世界に植物が多い。箱庭を「見られる」ことが意識でき、木村の述べるように「客観的」であり、もう一歩進んで言及するとすれば、自分を「感じ良く」見せる手段であったともとれる。Ａの＃３、＃４、Ｂの＃４では植物は無くなっており、自分を客観視し、感じ良く見せるより、自分らしい箱庭作りに没頭できたのではないかと考えられる。

６．作ること一否定すること

Ａの＃１では、多くの玩具を置いていき、ものが建っていく印象を受けた。そして、＃２ではそれに線路などが置かれていき、全体としては街をつくって行くような印象であった。それが、＃３で“怖いもの”が出現し、＃４では建物が壊されていくという過程に至った。Ｂの場合は＃１から＃３まで全部の回を通して、一度置いたおもちゃを片付けて、更地にして、新に作り始めている。作ることとそれを否定することが、この二人に共通して表されたと言える。

Ａの場合は自分が作ったもの、自分らしい無意識的なわけのわからぬ「怖いもの」が出現した後に、作品に、意識の介入を強め、「いいのいいのこれで･･･おわり」と、はっきりと区切りをつけている。一方Ｂの場合は、植物をたくさん使用し、前項で述べたように客観視した世界を、「お花とかやめる」や、言葉では直接表現しないが、どんどん排除し、自分の世界を作り直している。

前者の作りかえについては岩堂ら（1971）の調査の中で「箱庭制作態度評定カテゴリー」の１カテゴリーとして取りあげられており、「作りかえ、置きかえが極めて多く、最終作品に取りかかるまでに時間がかかる。玩具の吟味、選択に非常に時間をかけ、少しずつ考え考え作っていく。一見苦しそうにも見える」と説明されている。近田ら（2006）の成人に対する調査では、意識的に“こうするんだ”という感じで置いて、自分では良くできたと思ったが、その後具合が悪くなり、疲れを感じ、胸が気持ち悪くなった事例を紹介し、自分の内界から生じてくる未知のものをどう受け止めればいいのかと不安を感じており、意識的、操作的な制作姿勢になったと述べている。これは、先の「一見苦しそう」な制作態度とも一致し、内界からわき上がるものを抑制、統制しようとするあまりに、苦しい作業となるのではないだろうか。河合（2002）は箱庭を作ることによって、主体が制作者から、箱庭自体になっていくと指摘している。「自分が意図した様にではなく、どうしても何かを置かざるをえなくなったり、作ろうと思っていたことができなくなったり」、「まさに自分を超えた思いもかけないものが生じてくる」現象を、主体を箱庭に委ねた状態であるとしている。

こう考えると、先行研究の表現はいろいろであるが、Ａの場合は「怖いもの」を出現させたけれど、それを抱えきれなくなって、内界からでてくるものにストップをかけ、自分から主体を取り戻したのだとも言える。Ａの健康度の高さを表しているのではないか。また、Ｂの場合の作り直しは、意識的な表現が先行していたが、主体であることをやめ、箱庭の主体に沿おうとしたときに、または、内界の表現に身を任せたときに、今までのものを作りなおさざるをえなかったのではないかと思われる。

Ⅶ．結果

1．幼児の箱庭は年中の頃に統合度を高め、ひとつの統一した世界を表現するようになる可能性がある。
2．立会人との関係が成立していないと「守り」として宗教的玩具が中心部分に置かれる可能性がある。
3．立会人との関係が成立すると、より、内面からの表現が出やすくなる。
4．用途の定まっていないおもちゃは、規定されていない何かを表し、それを幼児と立会人が共有することで、幼児の内界の表現が展開していくとも考えられる。治療的に働くカギとも考えられる。
5．植物は自分を客観視して、隠したい、飾りたい、良く見せたいなどの意識が働くときに出てきやすいと考えられる。

6．作ったり、作ったものを否定したりするときは、意識的な思いと、内界から出てくるものとの交代が起こっている可能性がある。

Ⅷ．おわりに

前回は園児に１回ずつ箱庭を制作してみるに留まったが、今回は制作回数を増やし、一人の園児に対して同一の者が立ち会うことによって、関係性についても考察することができたので、発達と関係性についての両方からのアプローチを試みた。今後はさらに事例を継続して個別の変化と幼稚園児の「箱庭あそび」における共通性について検討を重ねたい。

謝辞：本研究を行うにあたり、S幼稚園の園長をはじめとする先生方、そして園児や保護者の皆様のご理解とご協力をいただけましたことに、心より感謝申し上げます。ことに貴重な時間を割いてご助言いただきました先生方、ありがとうございました。

Ⅳ．引用文献

伊藤真理子・真壁あさみ・間藤侑・田中弘子・近田裕之・高橋徹（2007）：箱庭と遊び―幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について―、『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』１、31～37

岩堂美智子・木村晴子（1971）：箱庭療法に関する基礎的研究（その２）－知的優秀児の箱庭表現をめぐって－、『大阪私立大学家政学部紀要』19巻、29～39

岩堂美智子・木村晴子（1972）：箱庭療法に関する基礎的研究（その３）－３・４・５歳児の箱庭－、『大阪私立大学家政学部紀要』20巻、25～34

河合隼雄・藤井しのぶ（1976）：箱庭の空間象徴的理解『日本心理学会大会発表論文集』第40回、1027～1028

河合隼雄・岡田康伸（1976）：箱庭療法に関する実験的研究－発達的側面を中心にして－、『日本心理学会大会発表論文集』第40回、1035～1036

河合俊雄（2002）　箱庭療法の理論的背景　岡田康伸（編）『現代のエスプリ別冊　箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ』至文堂、110～120

木村晴子（1985）『箱庭療法　基礎的研究と実践』創元社、81～82

近田佳江・清水信介（2006）制作者の主体的体験からみた箱庭表現過程、『北星論集』第43号、35～56

西村洲衛男（2001）箱庭療法における表現内容の解釈仮説、『椙山女学園大学研究論集　人文科学篇』32、69～78

岡田康伸・木村晴子（1974）　箱庭療法に関する実験的研究－宗教的玩具の位置について『日本心理学会大会発表論文集』第38回、662～663

山本昌輝（2002）「箱庭」と「こころの包み」『箱庭療法学研究』15（１）、3～16